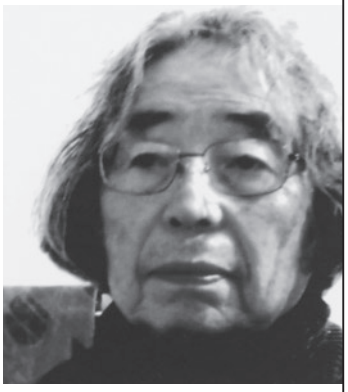
●発行・編集 全道美術協会事務局 田崎謙一 TEL011-383-5925 〒069-0831 江別市野幌若葉町33-7●HP http://www.zendouten.jp●印刷 株式会社アイワード

ZEN 全道展交流紙

2020.12
No.60

「見える」ということ



渡辺　貞之

前代未聞のコロナ禍が、北海道、いや私の住む深川という小さな街にも押し寄せています。その為に全道展が中止になり各種行事もなくなり、それに携わる役員の苦労はいかばかりかと察します。しかも会友が大量に退会し、数人もの会員がご逝去…私たちはこんな事態にどう対処していくのか、そしてそれでもなお絵を描き続けるその意味は…。私たちは今、真意を試されているのです。

「見える」ということは不思議なことです。ただの細胞だった私たちの祖先から何億年もの時間を経て、今私たちには「見える」という機能がそなわっています。

ところでその「見えて」いる世界は、本当は他人とは同じではなく自分だけの「見えている」現象なのだという説があります。そのように考えると、私は改めて「見えている」事物の存在をもっと大切に見直してみようと思うのです。自分だけがその存在を認知するということは、私の「個」の眼を真実として信頼しなければなりません。それに「見える」のではなく「見る」となればなおのことです。「見る」ということは、私自身の意識、つまり感受性や感情があって、そのフィルターを通して事物を察知・感知し、その存在を認知することになるのです。私たちは、普段何気なく物を見ていますが「見える」というこの事実をもっと大切に、外界と自己との関わりを深く感受しなければいけないと思っています。それが絵を描き続けて五十余年、なぜ私は絵を描き続けているのかという答えなのでしょう。

現代は「見た」ものから得たエキスを享受して創作する人が少なくなっているように思います。私には何をどの様に表現しようと自由であり、どう受け取るのも自由。しかし、価値の序列、順位もない非常に無節操な時代（「第二のバロック期」とも言える）になってきたように思えます。芸術だけでなく、哲学も科学も全て分裂の時代に渦まいている昨今。こんなことでは、私たち人間は「見てその存在を認知する」という役割を終え、漠然と生き、漠然とこの世から消えていくだけになってしまうと思うのです。私はまだ自分が、何故この世に現れたのかという問いには答えられませんが、せめて私が認知したこの世にある事物の存在を絵を描く行為を通して、確かめたいと思っています。

ART STAGE
―自分を見つめる表現―

どこから何を始めるか、そしてどこで結末をつけるかということは、作家にとって致命的な問題です。どんな場合でも仕上げようなどという気持ちで仕事をすることは意味のないことで、むしろいよいよ始まるか、という気持ちの積み重ねという連続性こそが作品の完成となるのです。

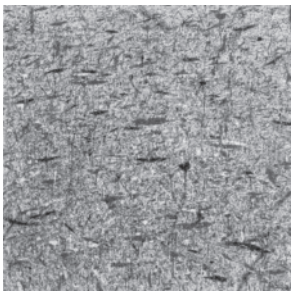
深川市アートホール東洲館

■竹岡羊子展（8月18日～30日）

「私は自分の絵のどれにも、初めからこんな絵にするなんてことは考えたこともありません。その都度湧き上がってきた気持ちで真剣になるのです」そう言う竹岡さんの作品は、一点でなく複数で見た時に、その意味がよくわかります。

「追求」…自らが画面の中で楽しんでいる。いや遊んでいます。遊び心には終結がありません。いつ終わってもいいし、いつまでも終わらないでもいい。作品を観ている私も、自然にリラックスして魅入るのです。

■髙橋靖子展（9月2日～15日）



作家にとっては部分を描いていても、それは同時に全体を描いていることであり、部分ができたということはすべてが一緒にできたことを意味します。これが髙橋さんの仕事に対するコンセプトなのだと思います。始まりの部分が出来てしまうと、後は時間に関係なく日々の生活のメモリアル…。そして画面に描き加えることが出来ないと思った時にお仕舞い。初めの部分ができてしまうということは中頃と終わりに向かう見通しもついてしまったことなのです。それにしてもあの美しい色彩構成は、なぜできるのでしょう。

■伊藤隆弘彫刻展（10月17日～31日）

見える物を使って見えない物を表現する。作者は四季の風をあらわしたいという。固い石と見えない風…感覚的には両極端の素材とモチーフ。その表現過程には作家の消え入るようなデリケートな感覚が必要になってきます。見通しよりも今、制作しているその瞬間こそが完成につながる。刻く、削る、磨く…やがて石がある表情を見せ始める。大変な緊張です。作家が幾度も幾度も触りながら確かめたその触覚感が観る者に触りたい気持ちを誘発するのです。

来年度の予定

■全道展旭川支部展　■竹岡羊子展
■櫂展　■谷口一芳展　■佐藤仁敬展

アートホール東洲館
ART HALL TOSHU-KAN
深川市経済センター2階
Eメールアドレス　bz649093@bz01.plala.or.jp

全道展　2020年の活動

75周年記念　会員企画展　11月12日㊍～24日㊋　道新ぎゃらりー
　　会友小品展　11月10日㊋～15日㊐　大通美術館

意義深い二つの展覧会を終えて
―― しっかりと感染対策も ――

企画部　川名　義美

2021年に行われる75周年記念全道展の前夜祭とも言うべき会員企画展及び会友小品展を無事に終了することができました。まさに全道展創立以来、最大の難局を迎えた中での開催でした。

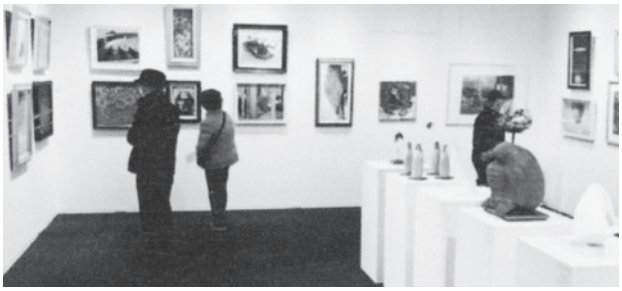
コロナ禍におけるこの企画はまず安全性を第一に検温、除菌、換気とマスクやフェイスシールドの着用等を行い、万が一に備え、来場者に連絡先の記入をお願いしました。会場のキャパシティを考慮し、作品の大きさに制限を設け、一年程かけて準備を進めて来ました。出品数は会友小品展が51点、会員企画展が94点でした。札幌ではこの時期雪も降り、コロナ情報が日々悪く変化するなど厳しい鑑賞日和でしたが、会友小品展・会員企画展ともに700名以上の多くの方にご来場いただきました。

現在の状況を考えますと、今回このような規模の展覧会の企画に携わり、好評のうちに終えることができましたのは、非常に幸運であると同時に大変意義のあることだったと思います。

今回の成果を踏まえ、来年の75周年記念全道展を更に盛り上げてまいりたいと思います。

会場をご提供くださいました「道新ぎゃらりー」、「大通美術館」と展示作業や会場当番など運営全般に惜しみなくご協力いただいた方々に厚く感謝を申し上げます。

会員展陳列作業中



コンパクトも魅力―会員展

すっきりとした大通美術館会場

会友小品展を鑑賞する人達

2021年　75周年記念全道展日程

■会　期　2021年6月16日㈬～6月27日㈰
　　10：00～18：00（最終日16：30まで）
　　※21日㈪休館日
■会　場　札幌市民ギャラリー
■搬　入　6月8日㈫・6月9日㈬
■審　査　6月10日㈭・6月11日㈮
■陳　列　6月15日㈫
■授賞式　6月19日㈯
■搬　出　6月27日㈰
　部　　門　絵画、版画、彫刻、工芸
　出品資格　北海道在住者ならびに関係者
　出 品 料　3点まで8000円（23歳以下2000円）
　　追加は1点ごとに1000円
　　※23歳以下(1998年4月2日以降に生まれた人)

賞　75周年記念賞、全道美術協会賞、北海道新聞社賞、八木賞、佳作賞、奨励賞
　北海道美術館協会賞（23歳以下対象）
　新人賞（同）

詳細は全道展ホームページで
全道美術協会　検索
http://www.zendouten.jp

ウィズ・コロナ　私の近況

長期化する新型コロナウイルスの猛威に、日常のサイクルも一変した。それぞれの思いを寄せてもらった。

〔絵画〕**山本　恒二**＝恵庭市

１月下旬から札幌の個展等には感染の不安があり電車では行ってません(車で数回)。会員、会友は高齢者が多いし新型コロナウイルスに感染すると危険と思う。

企画展で元気な顔の皆さんとお会いできるか少し心配なのです。

毎週末のデッサン会もやっと九月に行き始める。

好きなスケッチは時々行ってるが、厳しい残暑、最近の天候不順は困ったもの。マスクはわずらわしく疲れ気味。

〔絵画〕**渡辺美智子**＝札幌市

コロナという単語を耳にしない、目にしない日がなくなった。コロナとともに過ごす日常が当たり前になってしまった今、死別（夫）による深い喪失感や思い出の記憶はより強く心に響いてくる。それでも、コロナ禍の現実を受け入れ、穏やかに過ぎた時間を支えにして、自分の内面との対話を続けていこう。残された感覚を研ぎ澄ませて、夢が見られる幸せな自分を見つけていきたい。１つの風景が複数の風景に開かれるコラージュのように。

〔絵画〕**滝花　保和**＝函館市

今年の夏はいつもと違う。連日の様に報道では流れている。僕はというと毎日を変わりなく過ごしています、実際は展示が無くなったりしてるけど。今は先日札幌での個展が無事に終わってほっとしているところです。個展ではいつもと同じように皆さんに会えて、(マスク等はいつもと違うけど）嬉しい日々を送りました。出来ない中、できるだけ出来ることをしていく。そんな気持ちで変わっている日常の中で変わらずに過ごしていきます。

〔絵画〕**本山　タイ**＝新ひだか町

2020.1.1、穏やかな光の中で迎えた元旦であった。私にとっては、光輝く希望の春だった。ところがその光は一変して辛いものとなった。新型コロナウイルスのため、第75回展は、１年延期すると連絡が入ったからである。何故か力が抜けて心が折れた。７月中旬、右肩腱断絶のため、入院、手術、退院して、今は心静かに、渺茫（びょうぼう）万里の太平洋の光を追っている。闇も又光か？　誰かが言っていた。光の持つ意味を考えている。

〔版画〕**中嶋　詩子**＝札幌市

何も手に付かない不安定な毎日、気分を変えようと我が家の飼い猫君のマネをして、床でゴロゴロ転がってみました。すごーく楽しい。ずっと昔、草の上で同じ事していたなぁと思ったら急にススキの丘で遊んでいるうち迷子になった事、朝の窓に出来た霜の文様に見とれた事を思い出しました。懐かしい、覚えていたい、残したいと少しずつ目標が出来始めたこの頃。日々、猫に生き方の極意を教えられ、この時間を大切にしています。

〔版画〕**高崎　勝司**＝恵庭市

買って食べたほうが安いと笑う人もいるが市民農園に通い続けて25年。自分で作る安全でおいしい野菜にはまっている。そして僕の作品の着想は土の中にある。そこに棲む微生物たちは植物や動物と共存共栄、人も生きるための栄養を腸内細菌からいただいている。一方の新型コロナも微生物の仲間。破壊された自然、生態系の乱れで発生したのか。我々人類の経済最優先の姿勢が問われる。そして収束はまだ見えない。これからが正念場。

〔版画〕**渡邉　仙司**＝倶知安町

ニセコで飲食業を営む自分は３月に入り急激な観光客の減少を受け、去年より１ヶ月早くシーズンを終えた。例年であれば全道展に向けた制作をしている時期でしたが、時間が空いた割には何も手につかぬ日々を過ごしていた。しかし８月に入り毎年参加している「べるぱぴえ展」の開催が11月に決まり、あわてて制作を開始。やはり自分には締め切りが必要だと今回のコロナで学んだ。そして今も制作に追われた日々を過ごしている。

〔彫刻〕**棒田　志帆**＝枝幸町

４月、予定されていたものが変更になり、ぽっかりと時間があきました。９月～変更になった行事がつめられ予想の上をいく忙しさです。きっと大変なのは自分だけではないはずだと自分に言いきかせて、今日もがんばります。みなさんもお体お気をつけてお過ごし下さい。

〔彫刻〕**向川　未桜**＝札幌市

70周年記念展を最後に出品することができていませんでしたが、この度未曾有の渦中にあって思うところもあり、11月の会友小品展には出品させていただこうと思っています。大変な中ですが、駆け足で過ごしていた日々からいったん立ち止まって、ゆっくり自分と向き合う時間が取れたことは暗中の光でした。久しぶりに作品に向き合う中で、明けない夜はきっとないと思えたことを今後の道標にしたいと思います。

〔工芸〕**阿部　綾子**＝愛知県稲沢市

陶芸の展覧会等も、全国的に延期中止が多く、急ブレーキ。夏が過ぎ、少しずつ動き始めているように感じます。私自身の作陶は、今まで通り。手を止めず。コロナに負けるはずもありません。人の少ない場を求め最近は、お寺巡り。特に信仰が厚いわけではないけれど。古いお堂、美しい仏像。コロナ禍での、良い出逢いであった。平時には見えないものが、見えてくる。社会の中に、私の中にも。嘆かず、受けとめ、しなやかでありたい。

コロナ禍　雑感

〔絵画〕斎藤矢寸子＝旭川市

30年前、私は仏のルーブル美術館の踊り場を見上げていた。そこには頭上からの光を浴びて、今まさに船の舳先に降り立ったサモトラケのニケの像があった。風を孕んだ流麗な衣の襞が体の線に沿って流れ、頭と腕が失われた不完全な像にもかかわらず、トルソ(胴体)だけで勝利の女神の凛々しい美しさに圧倒された。コロナの影響で自粛を余儀なくされ本棚から1冊ぬき出し再読した谷川渥著「肉体の迷宮」。古今東西の絵画、彫刻における肉体表現の考察が著されている。そこにはトルソに関する西欧と日本の表現の違いが述べられている。西欧は黄金比に基づいたプロポーションと量塊（マッス）であらわす。対して日本の伝頼朝の肖像画等に見られるように歴史的肖像画といわれる物は顔立ちこそ違い、胴体といえる衣（束帯）は黒一色で塗られ平面的だ。それをパロディ化した、びじゅチューン＃おりがみよりとも＃井上涼も興味深い。コスチュームも西洋はウエストのくびれを強調するのに和服はずん胴を旨として項や手先の表情に重きを置いている。ここでも人体に対する解釈の違いが顕著になっている。久しぶりに裸婦デッサン会に参加する機会があり頭上に高く腕を組んで屹立するモデルと対峙した。ひき上げられた胸、腹部が強調され改めて三次元のマッスを画面に肉迫することの難しさ醍醐味を堪能した時間だった。コロナのため巷ではテレワーク、リモート授業が行われエンターテイメントの世界でもライブ配信、無観客試合が開催されやはり美術館、ギャラリーの閉鎖が相次いだ。そんな状況の中物理的に離れていても、アートを通じて社会と繋がる事は出来ないのか？　新しいアートの形式、発信のされ方を考察しなければいけない時代になったのではなかろうか。今までのように観客を待つだけのあり方は今後どうなるのだろうか。勿論、生の手触り感動を共有出来るのが大前提なのだが。ひきこもり生活が長引いているが決して悪い事ばかりではなく効率性の追求、生産力の向上ばかり求めている現代社会において、ポツンと一軒家で昔ながら淡々と生活している人々に、身の丈に合った営みの大切さを教えてもらった。やはり人間は自然の一部であり、それも微小な自然の一部なのだから。ふと空を見上げると、ぼんやりうろこ雲が広がっていた。

あの日　あの時　来た道たどれば

〔絵画〕黒木　孝子＝札幌市

コロナ禍は平凡な日常を不安と緊張の中に、第75回全道展も今年は中止となり発表の場が戻るのを心から待ち望むところです。こんな時、消えそうな記憶を振り返るのもよい機会かもしれない。

大人の絵に出会ったのは、小学生のころ中島公園にあった体育館で当時の日展を見せてもらった。中学生の時には油絵具をいじらせてもらった。この二つが油絵を始めた元のように思う。その後初めての給料半分ほどをキャンバスと絵の具一式につぎ込んで仕事のほかに油絵を描くという目標を手にした。古本屋で技術書を手に入れ読み込んだが慣れない言葉に四苦八苦、それでもデッサン教室に通ったり小さなキャンバスに風景や静物を描いたりとささやかに続けていました。嫁入りにも絵具一式を持ち込みました。

子育ての最中も紙と鉛筆で思いをつないでいました。油絵具が使えたのは10年ほど後になりました。転居先の稚内や釧路の地元展に出品もしました。全道展への出品は、あるとき人生それほど時間がないことに気が付いて慌てました。描くことは自分を磨くことと決め込み、それからは短い時間の貯金のような作品作りでした。

昨年絵を続けることに理解をしてくれた夫を在宅介護でみおくりました。あんたは絵描きだからな、と言ってくれていました。

介護は利用できるサポートはほぼ利用していたものの、みおくる3か月前、思いがけず自分が救急車に乗ることになりました。命を取り留めたのです。入院中家族やまわりに助けられその後の介護も何とかつづけていましたが全道展の作品作りは想像以上に厳しいものでした。不思議な時間でした。

絵筆を持つことにこだわる中で出会った先輩仲間知り合い友人、鬼籍に入った懐かしい人たち、また思いがけないつながりや再会に、よろこびや悲しみを感じながら自分の表現が大切に思えるこのごろです。

全道展俯瞰図

忘れ得ぬ人たち

渡会　純价＝札幌市

〝忘れ得ぬ人〟となると故人をさす。齢84歳ともなると数知れぬ出逢いがあった。この度は全道展に関わる人になるが、私にとって初出品からすると丁度60年にもなり、人生の7割以上も拘ってきただけに全道展に育てられ、恩恵をうけ、進言もしてきたものだと思う。

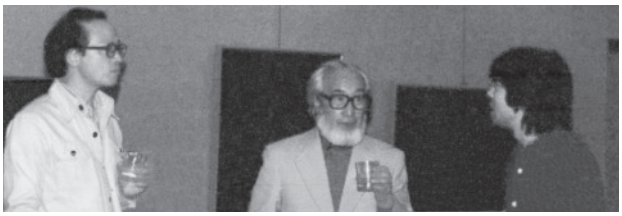
恩人の第一に上げるのは彫刻家の本田明二氏となる。全道展で長いこと事務局長を務めて黎明期を燦と輝かせた立役者といえる。風貌はシベリアからの抑留者そのまゝに、本場仕込みのロシア民謡はロシア人も舌を巻くほどの腕前であった。氏は釣りの名人で海釣りでも川釣りでも通う事で名を馳せた。晩年はアユ釣りに専念し、その折私が釣りの弟子入り第一号となった。アユ釣りの解禁は7・8月の夏場しかなく、シーズンとなると仕事（制作）は疎かになり3日に空けず釣り場通いとなった。主に余市川だが古平川、朱太（シュブト）川など遠出をし、私は常に師匠の助手席（私は無免許）でお供した。往復の道中は長く、この間の話合いは貴重な時間で、多岐にわたるのだが印象深いのはお互いに画業を生業とする者同志として、作家人生を語らい大きな教訓を得た。

1985年頃の本田明二氏と私

〈全道展創立のつわもの達〉

全道展70周年記念展の時、創立会員の似顔をドローイングした作品を出品した。私は第35周年記念展（1980年）の時43歳で事務局長を命じられ、当時は全部門合同で審査していた関係でほぼ全会員が顔見知りであった。只、審査には創立会員の出席は少なく、全員の方々にはお目に掛かれなかったが、札幌での個展で拝顔する程度でお話をする機会はほとんどなかった。全くお会いしていない人は川上澄生氏（電話では幾度か話合った）、斉藤広胖、居串佳一、伊藤信夫の各氏ぐらいである。似顔を描くにあたっては古い図鑑、画集など隈なく捜したがなかなか顔写真だけというのがなく苦労した。結局、斉藤広胖氏だけ見当たらず右端にシルエットとして記した。描き始めとしてハガキサイズに何枚かアイロニックに描いて、全体像をどう構成するか悩んだ。知る限りの人間関係を基にランダムに描いた。今は亡き人たちだから許しを乞うが、審査中に厳しく議論を闘わせた対峙する人たちを隣同士に描いた。例えば函館の橋本三郎氏と岩船修三氏、札幌の国松登氏と倶知安の小川原脩氏。あとは三雲祥之助氏と小川マリ氏夫妻は仲むつまじく描いた。生前は地元の作家とは交流があったが、一木万寿三氏、西村喜久子氏の葬儀では司会を務めさせていただいた。想い出に残るのは1971年、パリ・モンパルナスのリベリアホテルに滞在の時、同宿の松島正幸夫妻（前妻の詩子さんだった）とのお付き合いで幾度か食事をした。その折、全道展創立時札幌に居た作家との交渉など奔走した苦労話を聴かされた。

故人を偲ぶと創立会員以外にも多数の方々が想い浮かぶ。紙幅が尽きたが、語られるエピソードは山積する。是非記録に残しておきたいと思うのである。



この頃本郷さんとよく呑みました。右側は国松明日香君です。

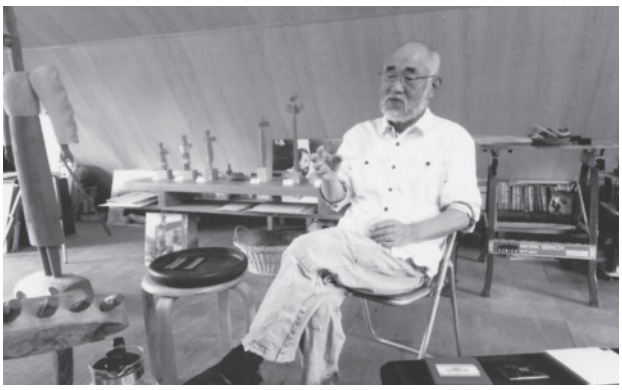
全道展を創立したつわもの達

全道展創立会員のエスキス

作家探訪～「二部 黎」道東の地に彫刻する

訪問・撮影　田崎　謙一

7月とは思えない低温の中、十数年ぶりに根室の地に立ち、2回目となる全道展道東地区展を鑑賞した。代表の宇佐美会友、そして三浦、森川両会員を始め、道東地区のみなさんの制作に対する真摯な姿勢に打たれた。翌朝、昨日の寒さが嘘のように夏らしい晴天に恵まれ、根釧原野の中心を占める別海町矢臼別に向かった。その理由は、彫刻部二部会員が73回全道展に来札された折、現在、根釧原野の真ん中に住んでいる話を聞いたからだった。以前、知床に近い斜里で廃校をアトリエに利用し充実した仕事をされていたが、いろいろ厳しい事情があり、矢臼別に最後の仕事場を求め転居する事になったと聞いた。とんでもない場所ですが演習がない時は自然豊かで夢のようなところです。こちらに来られたら是非立ち寄ってください、との言葉に甘え訪れることにした。矢臼別演習場に囲まれているためか車のナビには道が表示されず、演習地と私有地の境界すれすれすれの私道を進んで行くと厳重な有刺鉄線が張り廻らされ、監視小屋、警告灯、サイレンのようなものが不気味に敷設されていた。宇佐美会友からいただいたグーグルマップの航空写真が大変役に立ち、どうにか迷わず目的地までたどり着くことができた。二部会員がお住まいの敷地の中に入ると、丁度演習場反対運動の拠点として作られたコンクリートのモニュメントの修復をされているところだった。連絡なしの突然の訪問者に、始めは誰が来たのかと戸惑う顔が、すぐ私を認識し、にこやかに握手を交わしてくれた。ここは川瀬牧場という反戦地主の川瀬氾二氏が演習場整備のため国の用地買収を拒み、住み続けた場所で敷地は35ヘクタール。演習場に囲まれた牧場には砲弾の音が鳴り響き、馬やエゾシカが草をはむ横を戦車が走っていく土地だ。川瀬氏が亡くなった後、賛同する仲間と法人化しこの土地を守り続け平和運動の拠点となっている。元牛舎だった建物の二階をアトリエ兼美術館（平和の家）として開放し、詩人でもある奥様と暮らす。アトリエには小品から大作まで木彫、テラコッタ、の魅力ある作品がたくさん並んでおり、石の作品は年齢的に厳しくなってきているが、大きな石材があるので時間をかけて形にしたいと言う。広い敷地の中に自作の彫刻を設置し、その場所に案内してくれた。この辺りは太平洋戦争の時代には軍用馬の生産地で、多くの馬がここで育てられ戦地に送られ殺戮された。その形跡が今でも藪の中のあちこちに土塁として残っており、ちょうどその土塁の見える笹藪の前に自作の馬頭の石彫が鎮魂の碑として置かれていた。秋になるとこの馬の目のあたりに枯葉が落ちてきて、泣いているようにも見えるんですよと話した。平和の家の周りにも数体の石の彫刻があり、その一つに「釈阿蓮」という目を引く彫刻があった。平和運動家アレン・ネルソン氏がモデルで、ベトナム戦争で枯葉剤に侵され2009年に白血病で亡くなったそうだ。敷地の彫刻を見た後、急に嬉しそうに隣の家で昨日仔馬が生まれたので見に行かないか、と誘われた。それは是非見たいですねと言うと、軽自動車に乗ってくださいと言い、遠いのですか、いや少しですけれど、数日前に途中でクマと出会っているのでと話され、こちらはびっくり。手作りの私道とのことで雑木林の中を進んでいくと、窪地になっているあたりで車を止め、このすぐ先にクマがいたので今もまだいるかもしれませんよと平然と言いながら、車の中で息を潜める私を見てニコニコしている。隣家は高齢の一人住まい、その日は留守のようで、仔馬だけ見せてもらうことにした。我々が近づくと仔馬は元気に駆けずり回っていて、その愛くるしさに見とれていると、すぐに母馬が気づいて仔馬を守ろう近づいてきた。久々の癒しの一時、この向かいに現在矢臼別平和資料館が建設中でほぼ外観はできあがり2019年6月に開館予定とのことだった。



アトリエで語る二部会員

アトリエ＆平和美術館

めんこい仔馬に癒される

二部会員は小樽出身で、道教育大釧路校を卒業し釧路管内の中学で教鞭を執っていた。30才で全道展の重鎮本郷新さんに師事し、最後の内弟子となった。アトリエで本郷新さんを語る二部会員の表情から、今はない師匠と弟子の良き時代を、遠く懐かしむように目を細めていた姿が強く印象に残った。

（この取材記は、2年前の2018年に中断したままの草稿をベースにしている。また平和運動と歴史の足跡をたどる矢臼別平和資料館は全国の支援者のカンパによって立派に建設され昨年6月オープンした。（冬季間休館））

TOPIC プラス NAVI

―今なおファンに愛されて 神田日勝しのび美術作家展

活躍する57人の作品展示

十勝ゆかりの画家神田日勝（1937～1970）の没後50年を機に「躍動する十勝の美術作家展」が神田日勝記念美術館で開催された。管内の作家57名が日勝と同じ油彩、水彩、版画を1点ずつ前期（9月11日～10月11日）28名が、後期は10月13日～15日まで29名が展示した。日勝作品9点と長女絵里子さんの作も展示され来館者の目を楽しませた。全道展からも筆者含め11名が意欲作を出品した。（氏名は紙面都合で割愛）

同美術館の小林潤館長は「各団体の枠を超え多くの作家が出品。抽象、具象など個性の強い作品ばかりで必ず好きな絵に出会える。後期展に入っても連日の入館者で、管内ではこれまで類例のない展覧会だ。後期も前期（2851名）を上回るだろう」と喜びを語る。

私自身もこの展覧会の盛会を心から嬉しく思う。今年はコロナの影響で全道展75周年記念展も来年に延期になった。密だの飛沫だのを跳ね除けて、気力を大切に2021年に向かっての制作スタンバイに励みましょう。

（情報提供は渡邉禎祥会員）

十勝の美術作家展　展示会場

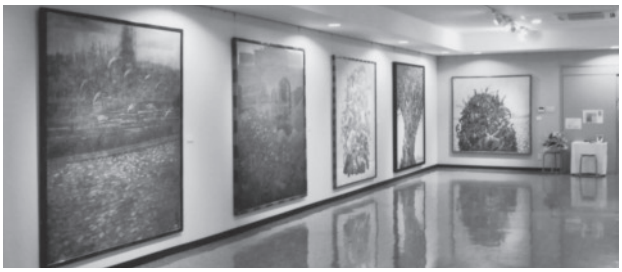
正面向かって右　神田日勝「若者の素顔」のための背景画

―北緯42°20′からの風その先へ 山田一夫作品展の開催

室蘭市民美術館企画展の一環で8月13日㈭～10月4日㈰まで山田一夫作品展が開催された。コロナ禍の影響で当美術館も各展覧会の中止が相次いだが、期間中1300人を超える来館者があった。全道展絵画部門で活躍する山田一夫会員は来道して40余年になる。この間、制作した作品は大作22点を中心に、初期の幌別鋼山の自然、友人との交流を題材にした作、死と生活廃品を構成しさらに工場、港、街並みと室蘭の地、北緯42°20′からに拘る。茫漠とした世界へと変遷して行くが不思議にも生活者の姿はない。静かな余韻が鑑賞者の心に残る良い展覧会になったと思う。

企画展には多くの美術館をささえる会のお手伝いと、来館者の励ましで成功している。本当に感謝している。

（情報提供は同館館長　工藤善蔵会員）



大作が並んだ会場

学生服姿もチラホラと

ギャラリートークで作品の紹介

編集後記

2020年がコロナ一色、一億総マスク化で終わろうとしている。コロナ撲滅はほぼ不可能なのだと言う。日常生活は感染対策が当たり前の現実社会になった。

先が見えない不安の中、全道展の将来像に思いを馳せる人も多いことだろう。さて、今回も寄稿のご協力をいただきZEN 60号を発行することが出来た。お互いの健康を祈り、来年は元気な姿での再会を。

〈（文責）米澤・川本〉